

■研究ノート■

「スペイン王国」の成立とコンベルソ問題に関する覚書

立石 博高

第1章 「スペイン王国」の成立

カトリック両王（カステイリヤ女王イサベルとアラゴン国王フェルナンド）は、イベリア半島のカステイリヤとアラゴンという二大王国の共同統治を実現した。彼らの治世にグラナダ王国の占領、ナバラ王国の併合も行なわれ、ほぼ現在のスペインの領土に該当する国家領域を治める王権を創り上げた。そのためにカトリック両王の治世は「スペイン王国」成立の時代と一般に言われている¹。それぞれの王国は中世以来の独自の政体を維持しており、こうした現実を前にイサベルとフェルナンドの国王としての肩書きは、依然として「カステイリヤ国王、アラゴン国王、ビスカーヤ領主、バルセローナ伯、等々」であったものの²、その支配領域には「スペイン王国（Monarquía Hispánica）」という呼称が定着していった³。

このスペイン王国の近世国家としての特徴をめぐって、一九九二年に発表されたエリオットの論文は、興味深い考察を加えている。すなわち、中世ヨーロッパの封建的秩序を克服して主権国家が成立したとするようなこれま

での絶対王政論を批判して、16・17世紀の近世国家の多くは、「複合国家（composite state）」であったと主張し、ネーション・ステイトにつながるような主権と領域の一体性はまだ有していなかったことを強調する。そしてこの典型がスペイン王国であり、それは「王権とそれぞれ異なる地方（諸国）の支配階級との相互契約にもとづいた」複合王政（composite monarchy）であったとする⁴。

このエリオットの論に触発されて、スペインでは、複合王政たるスペイン王国の特質をめぐる議論が盛んとなっている⁵。だが、ややもすると近代主権国家に比べて近世国家の限界性を問うというかたちで議論されがちで、中世イベリア諸国家と比べた上で近世スペイン国家の統合・集権化が、どのような特徴と内実をもつて進展したかについての指摘は不十分である。15世紀後半にはカステイリヤ王国、アラゴン連合王国、ナバラ王国、グラナダ王国が存在していたのであり、それらにまたがる単一王権の統治するスペイン王国——いかに諸国特権を温存していたにせよ——が成立する歴史過程を、あらためて考察する必要がある。

その意味において、15世紀末のカトリック両王に出発点をもつ近世スペイン国家が、別名「カトリック王国（Monarquía Católica）」と称されたことに着目したい。イサベルとフェルナンドの「カトリック王（el Católico）」という尊称は、フランス国王の称号「篤信王（le Très Chrétien）」に対抗するたちで、一四九六年に教皇アレクサンデル六世から獲得したもののだが⁶、カトリック信仰はその後諸王国にまたがるスペイン王国の統合原理として機能していくことになる⁷。そして、カトリックにもとづく宗教的・社会的秩序の形成は、それまでは許されていたキリスト教以外の宗教とそれを基にした法共同体の存在が禁じられることを意味した。中世盛期には国王自らが「三

宗教」の国王と名乗り⁸、キリスト教、イスラーム教、ユダヤ教という異なる宗教Ⅱ法共同体の「共生 (convivencia)」——もちろん、対等の共生ではなく、差別的序列があつた——を實現していたスペインは、ユダヤ教徒の国外追放(二四九二年)、イスラーム教徒の国外追放(二五〇二年)の手を経て、カトリックのみの宗教Ⅱ法共同体となつたのである⁹。

スペイン王国は、自らを正統なるカトリック王国として維持していくために腐心するが、他のヨーロッパ諸国と異なる二つの制度が、中世から近世への移行期に生まれ、ともに19世紀前半のアンシャン・レジームの解体まで存続する。一つは、異端審問制 (la Inquisición) であり、もう一つは「血の純潔 (Limpieza de Sangre)」規定である¹⁰。

一四七八年、ローマ教皇シクストゥス四世がカトリック両王に認可したスペイン異端審問制は、新異端審問制とか近世異端審問制と呼ばれるように、それまでの教皇・司教の主導する局地的かつ非恒常的な中世異端審問制と異なり、スペイン王権に異端審問官の「推挙権 (Patronato Real)」を認め、かつスペイン王国全体に広がる恒常的制度として組織される¹¹。教皇権という普遍的権威に支えられることによって成立したこの制度は、「あらゆる諸特権 (fueros) とは独立に、それらを超えるかたちで」その権限を行使し得た¹²。スペイン王国は、同一王権による諸国の支配という人的Ⅱ王朝的統合に過ぎなかつたので、アラゴン、カタルーニャ、バレンシアといった諸国への異端審問制の導入はさまざまな困難を伴つた。また、それが実質的に機能するためには多くの時間を必要とした。しかしながら、ひとたび導入されると、新異端審問制は、スペイン王国の領域全体にまだ主権を確立し得ない王権Ⅱカトリック王権が、「異端」という宗教的問題を口実にして諸国・諸身分に介入していく唯一の、だが有効なる手段となつていったのである¹³。

「血の純潔」規定は、第3章のグティエレス・ニエト論文紹介のなかで詳述するが、かつてのイスラーム教徒・ユダヤ教徒およびその子孫、すなわち新キリスト教徒 (cristianos nuevos) を、もともとどのキリスト教徒、すなわち旧キリスト教徒 (cristianos viejos) と区別し、「モーロ人やユダヤ人の血が混じらない (limpios sin raza de moro ni judío)」という規定を盛り込むことで、さまざまな団体や役職から新キリスト教徒を排除しようとする社会的・人種的差別規定であるが、これは15世紀半ばから17世紀にかけて大きな社会的意味を持ったとされる¹⁴。旧キリスト教徒は、キリスト教への新たな「改宗者」、すなわちコンベルソ (converso) をキリスト教徒共同体に受け入れたものの、彼らを同一の法的地位におくことは許容できず、その一方で、「旧キリスト教徒」という社会的価値をスペイン王国の正統なる臣民という立場に重ね合わせていったのである¹⁵。したがって、「血の純潔」諸規定として結晶化するコンベルソ問題は、かつての複数の宗教共同体から単一の宗教共同体へと転化する過程で現れたスペイン王国特有のものであつた。

さて、新異端審問制は、新キリスト教徒も旧キリスト教徒ともにカトリック的社会規範のなかに押し込めて、彼らが正統的信仰から逸脱するのを防止する装置として機能していく。その意味では、キリスト教徒のあいだに差別をつける「血の純潔」規定とは無縁の制度であつた¹⁶。しかしながら、設立当初の異端審問制が告発の対象としたのは、もっぱらコンベルソのなかの疑わしきキリスト教徒、すなわちユダヤ教からキリスト教に偽装改宗した「隠れユダヤ教徒 (conversos)」だったのである¹⁷。一四九二年のユダヤ教徒追放令の公布も、コンベルソ問題に対処しようとする異端審問制の王権への働きかけが直接的契機になつたと最近の研究は強調する¹⁸。したがって、スペイン近世国家の成立の歴史的特質を考察するに当たっては、コンベルソ

問題を異端審問制や「血の純潔」規定の展開との絡みにおいて詳細に検討する必要がある。

第2章 コンベルソ問題の存在

すでに述べたように、中世のイベリア半島には、同じ「啓典の民」とは言え、三つの異なる宗教Ⅱ法共同体が存在していた。半島を征服したイスラーム勢力は、キリスト教徒とユダヤ教徒に対して、ジズヤ（人頭税）の納付とイスラーム教の冒瀆禁止などを条件に、共同体としての存続を許容していた¹⁹。同様に、再征服運動（レコンキスタ）を行なうキリスト教徒の側も、基本的にはイスラーム教徒とユダヤ教徒をモレリア（モーロ人街区）、フデリア（ユダヤ人街区）での居住を条件にそれぞれの共同体としての存在を認めていた²⁰。イスラーム支配下で少数宗教共同体が「ズインミー（庇護民）」と規定されたのに対して、キリスト教支配下でのユダヤ教徒は「国王隸属民」とされ、ユダヤ教徒もイスラーム教徒も特別の直接税Ⅱ人頭税を国王に納めていた。

同胞が南に拠点をもっていたために、再征服運動の過程においてイスラーム教徒有力者層がキリスト教支配下にとどまることはまれであった。したがって残留したムデハル（キリスト教支配下のイスラーム教徒）が共同体として脅威となることも少なく、彼らのなかから社会・経済的上昇を遂げるものもいなかった。これに対してユダヤ教徒の生活は、キリスト教共同体と深くかわっており、なかには王権や貴族に仕え、その手足となる有力者層が生まれたことは周知の事実である。中世におけるユダヤ教共同体（アルハーマ）についての知見は先行研究に譲るとして²¹、問題は14世紀半ば以後の反ユダヤ

的動きの高まり、とくに一三九一年の全国的なポグロム（ユダヤ人虐殺）を契機として「共生」が崩壊するなかで、多くのユダヤ教徒がキリスト教に改宗したことにある²²。

この改宗が「自発的」であったかどうかは議論の分かれるところである。H・バイナルトをはじめ従来の見解の多くは、改宗ユダヤ教徒の多くがユダヤ教信奉を捨てなかったと言う²³。それに対してN・ロスは、従来のコンベルソⅡ隠れユダヤ教徒という理解は、一方では、ユダヤ教のアイデンティティを強調する立場から、他方では、コンベルソ迫害を正当化する立場から生まれたものであり、どちらも護教論的立場からの誤謬であると言う。そして彼は、コンベルソのほとんどは紛れもない「自発的な」改宗者であった、と主張する²⁴。どちらに比重を置くかはさらなる実証研究の成果を待たねばならないが、問題はそれにとどまらない。すなわち、ネタニヤフの主張するように、15世紀に生まれるコンベルソ問題の核心は、彼らの改宗の真偽にあるのではなく、旧キリスト教徒が新キリスト教徒にどのようなイメージを抱き、またどのようにコンベルソ問題を利用しようとしたかにあるからである²⁵。

旧キリスト教徒のコンベルソへの反感は、伝統的なユダヤ教共同体への敵意に起因するだけではない。一三九一年のポグロム以後、ユダヤ教共同体は衰退の一端を辿っていた²⁶。それに対して、キリスト教共同体の一員となつたコンベルソは、もともとのキリスト教徒と同一の法的・社会的地位を享受することができるようになり、したがって15世紀を通じて彼らの社会進出には著しいものがあつたのである。とくに聖職者としての活躍、都市官職の購入による地方行政機構への参与は、旧キリスト教徒の反感を招くほどに甚だしかった²⁷。

こうした15世紀の過程を通じて、民衆の間には反ユダヤ感情から反コンベルソ感情への移行が見られ、反コンベルソ暴動に発展するような諸事件も増えていった²⁸。そしてとくに顕著な出来事は、コンベルソが都市統治構造に関与したために、都市内部の党派争いのなかに巻き込まれていったことである。一四四九年のトレード市の反乱は、王権と寡頭支配者層の抗争に、民衆の反ユダヤ・反コンベルソ感情が利用された出来事であった。このとき初めて、コンベルソを公職から排除する都市条例が設けられるが、出生・血筋という事実によって特定のキリスト教徒・改宗者を排除する反乱者たちは、「人類の敵」として教皇によって糾弾された²⁹。しかし、これは「血の純潔」規定が、さまざまな団体や役職に広がっていく出発点となったのである³⁰。やがて、コンベルソのなかの疑わしき改宗者を対象として異端審問制が設けられ、ユダヤ教共同体の規制・隔離政策を遂行したのちにユダヤ教徒追放令が公布されるが、旧キリスト教徒としての社会的価値を確認するためには、事実が虚偽かには関わりなく「イマジネール」としてのコンベルソ問題は存続していくことになる³¹。

ところで、カトリック両王期を出発点とする「スペイン近世社会」が、このコンベルソという少数社会集団（マイノリティ）を抱え込んでいたということ、そして、この集団への特定の社会的評価が、スペイン近世社会構造の形成にとつての基本的要因となったということは、近年のスペイン近世史研究が明らかにした重要な側面であるが、一九七〇年代に入るまではこのことはほとんど看過されていたのである³²。そのなかで、とくに一九七三年に著されたグティエレス・ニエトによる論文「16世紀カステイリヤのカースト的身分制構造」は、階級、身分、カーストという社会階層秩序の三つのカテゴリーをこの時代の歴史分析に用いた画期的仕事であった³³。

しかしながら、我が国でもこの論文の重要性は指摘されているものの³⁴、今までその内容の全体的紹介は行なわれていない。そこで次章では、今後史料に則ったスペイン王国とコンベルソ問題の研究を進める上での準備ノートとして、グティエレス・ニエト論文の基本的要旨を纏めることにしたい。

第3章 カースト的身分制社会

「16世紀カステイリヤのカースト的身分制構造」と題されるグティエレス・ニエトの論文は、以下のような構成の5章から成り立つ（ただし、章のナンバリングはされていない）。

第1章 歴史学とカースト問題

第2章 コンベルソと15世紀カステイリヤにおけるブルジョア発展の可能性

第3章 ユダヤ教徒追放とカースト制度の廃止

第4章 「血の純潔」規定——その社会的意味

(A) カステイリヤ都市機構と「血の純潔」

(B) 金のもつ「転覆者」の役割

(C) 「出生の純潔」と「生活の純潔」という二重の要求

第5章 身分制的価値とカースト的価値の結合

さて、まず第1章（五一〜五三頁）では、一九七〇年代までの研究史について整理を行ない、15〜16世紀に出現するカステイリヤ社会構造について新たな概念を提出する。ここでは研究史整理の詳細は省くとして、結論的にグティエレス・ニエトは、主に一九五〇年代に繰り広げられたアメリカ・カストロとサンチェス・アルボルノスの論争³⁵を、同じく16世紀カステイ

リヤ社会の現実に接近するための二つの方法であるとして、両者の方法の統合を提唱している。つまり、前者は社会のカースト的編成に注視し、後者は身分制的編成を重視したが、この両カテゴリーは互いに排斥し合うものではなく、16世紀に現れたのは「カースト的身分制構造」(estructura castizo-estamental)であつたと主張する。ただし、基本的な社会階層秩序の原理は、他のヨーロッパ諸国と同じくカステイリヤの場合も、身分制的なものであつた述べる。

この「カースト的身分制構造」はどのようなものかという点、15〜16世紀のブルジョア的發展によつて階級的社會構造が出現して、既存の貴族社會が揺らぐことに対しての反動であつた、とグティエレス・ニエトは見る。すなわち、15世紀末のカトリック両王期には国民の宗教的統一が行なわれて中世後期のカースト社會はたしかに消滅したが、身分制構造を補完するかたちで「疑似カースト的構造」(ficta estructura pseudocastiza)が維持され、そうしたカースト的要素が、階級的特徴の社會が形成される危険から「身分制構造」(estructura estamental)を守るのに貢献した、とする。中世後期から近世初頭のブルジョアの台頭に対して、ヨーロッパ諸國はそれぞれにこれを抑えようとする動きをとるが、カステイリヤの場合は、「カースト的身分制構造」が創り出されることによつて強固に身分制社會が存続した、というのである。

こうした概念提起に続いて、以下、具体的な歴史過程の考察に入る。第2章(五三〜五二八頁)では、15世紀カステイリヤではブルジョアの發展の可能性が大きく、しかもコンベルソの階層にもその道が開かれていたことを指摘する。まず、カースト的階層秩序の一般の特徴を挙げた上で、一三九一年(全国的なボグロムの起こった年)以前のカステイリヤ社會は、カースト

社會と規定しうる大きな特徴を備えていたという。つまり、キリスト教、イスラーム教、ユダヤ教という三つの宗教が存在し、それぞれが三つの民族に結びつき、法的諸規定が三つの集團の機能・職能を大きく定めており、さらに「社會的強制」(imposición social)によつて各集團の特徴付けが行なわれていたからである。

一三九一年のボグロム以後、カステイリヤ社會のユダヤ人差別は法的にも社會的強制を通じても強化されたが、迫害を恐れたユダヤ教徒がキリスト教に改宗したことによつて、キリスト教カーストにコンベルソが大量に参入するという現象が生まれた。つまり、ユダヤ教徒がますます少数集團化し、ごく限られた職種へとその職能が限定される(とくに一四二二年のバリャドリール法令による)。一方、コンベルソはキリスト教徒として、中世後期の經濟的・商業的拡大のなかでブルジョアの發展の可能性をつかみ、社會的上昇を果たしていく者が多く見られた。しかし、15世紀半ば以後、「イダルゴ的」反動が起こり、社會的名譽の享受と手工業活動への従事は両立しないという主張が広まていく。

第3章(五二八〜五三七頁)では、下位カースト集團(ユダヤ教徒、イスラーム教徒のスペインからの追放——結果的にはカースト制度廢止——の意味を問う。まずは、カトリック両王による追放措置の原因をめぐる諸解釈を紹介した上で、グティエレス・ニエトは、両王の王權の歴史的性格を議論し、それが身分制社會の「社會秩序の保障者」であつたことに注目する³⁶。そしてユダヤ教徒追放の措置も、社會全体からの要求を満たす——結果的に王權の正当性を了解させる——ことにあつた。つまり、農民層の都市ブルジョアへの反発、聖職者のシナゴグとユダヤ教信奉への反発、貴族の身分制的生活への脅威者たるブルジョア(ユダヤ教徒も多く含まれる)への反発などに依

えるかたちでの社会政策であった、と彼は見るのである。「カトリック両王は、ユダヤ教徒の追放が社会において好意的な反応を引き出すことを十分意識していた。さらに、王権を、排外主義的になっていった旧キリスト教徒カーストの諸理念の体现者として示しうることを、十分に意識していた」と彼は捉える。

ところで、ユダヤ教徒追放の措置を積極的に歓迎していたのは、ブルジョアたち——グティエレス・ニエトはこの概念を「農牧業とは異なる職種に従事する人々で、それは純粋な商人から職人まで包摂する」として広義に使用している——でもあつたことを指摘する。なぜならユダヤ教徒追放は、こうした都市的活動を行なう人々にとつて競争者の排除につながつたし、同時に重要なことは、彼らが除かれることで、商業・金融・手工業活動からユダヤ人を想起することによるこれらの活動への社会的軽蔑の色合いを取り除くことができると思えたからであつた。

第4章（五三七〜五五八頁）では、まず最初に、上述のユダヤ教徒追放の措置が、ブルジョアたちの期待を満足させることにはならなかつた、と述べる。一方では、ユダヤ教徒住民の一部しか出国の道を選ばなかつた——キリスト教に改宗してコンベルソとなつた——からであり、他方では、今度は「ブルジョアユダヤ教徒」が「ブルジョアコンベルソ」と結びつけて見なされるような状態に変わったからである。

ただ、こうした「ブルジョアコンベルソ」という見方やコンベルソへの反感は、一四九二年以後に突然生まれたものではなく、15世紀を通じて次第に醸成されたものであつた。グティエレス・ニエトは、「コンベルソは、15世紀カスティーリヤの社会的葛藤の主要な舞台において、その触媒となり、犠牲者として現れた」と捉える³⁷。なかでも、後に重要な結果となつて

現れるのは、一四四九年にトレードで見られたように、「伝統的な都市貴族が、都市住民の反コンベルソ感情をもとにして、「血の純潔 (limpieza de sangre)」——「モーロ人やユダヤ人の血の混じらない」古くからのキリスト教徒であること——を都市自治体機構への参与資格に求める、すなわち「血の純潔」証明を「彼らの社会的・政治的アイデンティティの維持装置」として利用するようになったことであつた。

そして第4章（A）でグティエレス・ニエトは、カスティーリヤ都市機構において「血の純潔」規定が広がる背景として、14世紀半ばころの「開かれた市会」から「閉じられた市会」への移行、つまりレヒドール制（市参事会の成立と、その後のレヒドール職購入者に占めるコンベルソの増大、さらに、「家系」や「団体」といったかたちの官職資格者を制限する動きについて言及する。

次いで第4章（B）では、中世後期の商業・経済活動の活発化によつて、金銭Ⅱ富が、伝統的な社会秩序を動揺させる「転覆者」としての役割をもつようになつていったことを、さまざまな事例を挙げて指摘する。とくに15世紀後半から16世紀にかけてのカスティーリヤ社会において金銭的価値が重要視されたことを、「世の中には二つの家門しかない。持つ者と持たざる者の家門である。」といった当時の処世訓・格言を列挙して示している。

そして第4章（C）では、上述のような社会的動きに反応して、伝統的な貴族層が、自分たちの特定の団体——とくに「宗教的Ⅱ身分的な信徒会——への入会資格に、「血の高貴さ」と「高貴な生活様式」を要求するようになった、とグティエレス・ニエトは見る。とくに、ユダヤ教徒がコンベルソになつてしまうと、ブルジョアたちのなかにコンベルソが包摂され、ゆえにブルジョアの活動は「ユダヤ的・コンベルソ的意味合い」をもつものだと

主張してブルジョア活動全体を貶めようとする言説が広められていく。こうしてブルジョアの社会的上昇を制限する手段として、「きれいな出生ときれいな生活 (cuna limpia y vida limpia)」が要求される。例えば、一五〇三年に設けられた「サン・イルデフォンソ信徒会」は入会資格を「ユダヤ人やモロ人の血筋のコンベルソは除かれるものとし、きれいな血の騎士と貴族だけが入会でき、職務に就く者でも担税者でもあつてはならない。」と定めている。

こうしてグティエレス・ニエトは、「コンベルソ差別は貴族層のあいだから生まれて、反ブルジョアの性格をもっており、新キリスト教徒と旧キリスト教徒への住民の分割を助長した」と考える。つまり、「血の純潔」は、(1)ブルジョアの競争力の削減、(2)ブルジョアの間の分裂、(3)さまざまな軋轢の原因をコンベルソ、そして大ブルジョアへと転化、(4)幅広い社会層が出生の重要性を認知、(5)ユダヤ教とブルジョアの行為との同一視を助長、といったことにつながつたと捉える。

そしてコンベルソ差別は、次第にカステイリヤ社会の諸階層・諸団体へと広まっていくなかで、それを、彼は次の四つに時期区分する。

(1) 一四八〇年までの第一段階。差別は主として、貴族のイニシアティブで自治体諸機関や身分的諸団体で行なわれる。貴族以外の人々も、この差別を助長した。

(2) 一五二〇年までの第二段階。反ユダヤ的宗教的緊張から、「血の純潔」への関心は、さまざまな宗教諸機関(修道会、神学校、聖堂参事会)に広がる。

(3) コムニダードス反乱鎮圧後の貴族反動を特徴とする第三段階。「血の純潔」規定が諸団体に拡大した。

(4) 一五五〇年代の「血の純潔」規定の広まりを抑止しようとする動きの

失敗と、その後のカステイリヤ社会の「チベット化 (tibetization)」。¹⁾ フェリーペ二世は、人々の「血の純潔」崇拜を、自らの宗教・政治目的に利用した。

こうした差別拡大にあたって、その正当化のための理論・教義が現れるが、それらは法的なものと宗教的なものの二つに大別される。法的には、「世襲的共同責任」が、宗教的には、「神の思し召し」と「キリストを十字架にかけた民」ということが根拠とされた、とグティエレス・ニエトは論じている。

結局、「血の純潔」規定の広がりは、「経済的領域においても知的領域においても、社会のもつとも活発で、もつともブルジョアの性格を帯びた人々の集団を排除することに役立った」。加えて、奢侈禁止法が制定され、王権の経済政策によって商工業活動は一部の特権的ブルジョアに制限され、官職も事実上、貴族の独占となった。こうしたブルジョアの台頭を抑えて貴族身分を強化する動きは、近世の絶対王権に支えられたものであった。なぜなら、「王権は、厳格に上下の秩序の保たれた社会に関心を抱いていた」からだ、とグティエレス・ニエトは主張する。

最後に第5章(五五八〜五六三頁)では、あらためて「身分制的価値」と「カースト的価値」の結合の複雑さを問題とする。16世紀末カステイリヤでは、社会的榮譽が語られるとき、人々は三つの榮譽(honra)を念頭においていたとされる。一つは「積極的榮譽」で、ある人物がどのような高い社会的地位を占めているかということ。二つ目は「否定的榮譽」で、ある人物に不名誉の要素がないということ。そして三つ目は「形而上学的榮譽」で、社会がある人物の社会的資質についてどういう「考え」を抱くかということ。そして、近世カステイリヤ社会の場合、身分制的社会秩序の内部に、「血の純潔」というカースト的カテゴリーが持ち込まれたことにより、「二重の

高貴さ」——「貴族」と「血の純潔」——が生まれて、錯綜した価値意識が生じることになった。例えば、血筋にまつわる諸々の理由で、大貴族でさえも、「最低の者のなかでもっとも卑しい者にも劣る」者と見なされることがあった。反対に、貧しい農民も、古くからのキリスト教徒であるがゆえに「血の純潔」を誇ることができた、と指摘する。

それでは、なぜこれまで16世紀カステイリヤを研究対象とした歴史家たちが、社会のカースト的現象を把握できなかったかという点と、とくに「リナヘ(linaje)」という言葉がもつ二重の意味を看過したことにある、と言う。つまり、当時のカステイリヤ語の用法では、「リナヘ」は「血縁集団」(すなわち、「家閥」)を意味するだけではなく、広い「血筋集団」を意味しており、後者の場合は「カースト」と同義であった。つまり、身分制的階層秩序のカテゴリが、カースト的階層秩序のカテゴリと絡み合ったかたちで使われていた、とグティエレス・ニエトは指摘する。

第4章 今後の課題

以上、グティエレス・ニエト論文の骨子を紹介した。それまでの研究がコンベルソ問題をスペイン近世社会のなかの部分的で異質なものと捉えていたのに対して、グティエレス・ニエトは、身分制的社会秩序が形成される過程の中の重要な要素であったと理解し、カステイリヤ社会の特質は、「疑似カースト的構造」によって補完された「身分制構造」、すなわち、「カースト的身分制構造」にあるという、きわめて大胆な魅力ある仮説を提示したのである。その後の関連論文では、「血の純潔」規定が社会の隅々までいかに広がり、16世紀後半フェリーペ二世の時代には、カステイリヤ社会の「チ

ベット化(Hebreización)」——「モロ人やユダヤ人の血が混じらない古くからのきれいなキリスト教徒(cristianos viejos, limpios, sin raza de moro ni judío)」社会の維持——が行なわれたかを指摘している³⁸。さらに別の論文では、「旧キリスト教徒」という価値が社会の至上価値となる中で、少なからぬ者が「新キリスト教徒」を祖先にもつ「イダルゴ(貴族)」の「不純さ」に対して、農民層が自分たちの「純潔さ」を誇るという庶民感情が広まったことを明らかにし、スペイン黄金世紀の文学の特異性——農民の「誇り(honra)」をテーマとする——の社会的背景を描いている³⁹。

さてグティエレス・ニエトは、15〜16世紀におけるカステイリヤのブルジョアの発展を強調し、そうした台頭するブルジョアジーと対抗し既存の社会秩序を維持するために貴族層が「血の純潔」を要求し、結果として「カースト的身分制社会」が生まれたと想定した。しかし、大西洋貿易で栄えたセビーリヤなどを除けばこの時期のカステイリヤ社会においてブルジョアジーの形成は限られており、総じて、16世紀の経済的繁栄というものもかつて想定されたほどの規模も広がりもなかったことが明らかである⁴⁰。では、貴族的反動を強調したグティエレス・ニエトの仮説が有効性を失ったかという点、必ずしもそうとは思われない。なぜなら、かつて想定されたほどのブルジョアジーの形成がなされなかったとしても、貴族の側がより強固な伝統的社会秩序の維持を企図して、「血の純潔」を要求したと考えられるからである。

しかし問題は、「血の純潔」と「生活の純潔」がカステイリヤ近世社会にどれほど社会的価値として受け入れられ、そして社会秩序の固定化に役立ったかということである。「血の純潔」諸規定がさまざまな中間的諸団体に広まったということに疑問の余地はないが⁴¹、その実効性については、論者

によって大きく評価が分かれる。グティエレス・ニエトの見解を踏襲してベナサルは、「大学寮、権威ある信徒会、大修道会、大聖堂参事会、都市参事会職などに参入しようとする者はすべて血の純潔の調査を受けた」と述べており、ファイアールも、「血の純潔はスペイン経済の遅れの要因の一つであった。それは労働と貨幣への軽蔑をもたらした」と指摘している⁴²。

他方、こうした見解に真つ向から反論したのが、カーメンの論文である⁴³。すなわち、「血の純潔に対する感情はスペイン社会を支配するにはほど遠かった」し、「二四九二年の追放後もずっとスペインは多文化社会であり続け、家系の血筋問題は社会上昇の障害には必ずしもならなかった」と述べて、コンベルソンの社会上昇の例、異端審問所関係者を含めて「キリスト教徒」同士の人種的差別に反対した論者の例などをさまざまに列挙した。そして、「スペインの共存という特別の『歴史的』性格によって、一方で隠れユダヤ教徒への迫害は緩められたし、他方で著名なコンベルソンの社会の上層に参入することが許容された」と述べている。

しかしながら、「血の純潔」規定に対する反対が知識人の限られた世界でしか起こっていなかったことをドミンゲス・オルティスは指摘して、近世社会においてこうした社会的価値がいかに重要な意味を有したかをあらためて主張している。そして、とくに中間層の社会的上昇にとっては、きわめて否定的に作用したと強調する⁴⁴。このことを筆者もまた、マドリード市参事会員の閉鎖的性格との関連で指摘した⁴⁵。

以上、我々は、「用心深い人は結婚しようとする女性の資質を厳密に調べ挙げ、誰の娘で誰の孫かと調査する。……だが、彼の隣人や敵対者が、彼の妻の曾祖母のさらに昔の祖母がモリスコ女性か改宗ユダヤ人女性だったことを明らかにすると、彼がどんなに名誉があつて高貴であつたとしても、

彼とその妻のあいだに生まれた息子は、改宗したばかりの者であるかのように、賤しい者と同列に見なされてしまう。」⁴⁶という同時代の言葉に現れる社会的価値（「モロ人やユダヤ人の血が混じらない」ことへのこだわり）を、スペイン近世社会の重要な特徴の一つと考える。今後は、「血の純潔」規定に表象された疑似カースト的要素の具体的影響——社会的・経済的・文化的——を、カーメンの批判を考慮に入れつつ、諸階層のレベルにおいて史料的に明らかにしていく必要がある⁴⁷。そして、こうした作業を通じて、グティエレス・ニエトの提起した「カースト的身分制社会」という概念の有効性もあらためて問われるであろう。

注記

1 ここではわれわれも便宜上「スペイン王国」の名称を使用するが、カトリック両王に始まる同一王朝によるスペイン統治が、長らくスペインの保守的歴史学が主張したような「近代国家の成立」、「国家統一の実現」と呼べるような実態を備えたものではなかったことは、近年のスペイン歴史学が明らかにした成果の一つである。カトリック両王による共同統治もカルロス一世（神聖ローマ帝国皇帝カルル五世）以後のスペイン・ハプスブルク家による支配も、王朝支配領域の諸国がそれぞれに独自の統治機関、議会、税制、貨幣などを維持するという現実を解消することはできなかった。16世紀以後、カステイリヤ王国の主導のもとにスペインの統合が次第に進むが、領域の法的・政治的一元化の一応の実現がなされたのは、18世紀はじめで、スペイン王位継承戦争の結果アラゴン王国の独自の政体が廃止されたことによる。しかし、ブルボン家による新たなスペイン支配も、身分制的諸特

権と地域的諸特権の体系を突き崩して中央集権化を推し進めることはできなかった。カトリック両王期の全体的特徴については、関哲行・立石博高共編訳『大航海の時代——スペインと新大陸』(同文館、一九九八年)「序、大航海時代のスペイン」三〇—四八頁を参照。

また、拙稿『スペイン王国』の構造、(立石博高ほか編『スペインの歴史』昭和堂、一九九八年)、二三八—二四四頁は近世国家スペインの統治構造を概観した試論。

2 この点は、当時の年代記作者ブルガールの記すところ、¹¹⁾「スペイン国王(Reyes de España)」という名称の採用は、議論のまじり終わっていた。¹²⁾ Beneyto, Juan, *España en la gestación histórica de Europa*, Madrid, Instituto de Estudios Políticos, 1975, pp. 201-208 を参照。ちなみに、¹³⁾「スペイン国王(Rey de las Españas)」という用語は正統派に使用されるのは、カデイス議会(一一八〇年)の際が初めてであった。但し、の場合も las Españas という使用方であり、スペイン領域の多元的現実が反映している。¹⁴⁾ フランスには常に「フランス国王」が存在したとは、大いに異なる。¹⁵⁾ Molas Ribalta, Pere, *La monarquía española (siglos XVI-XVIII)*, Madrid, Historia 16, 1990, pp. 9-12 を参照。

3 たとえば、イタリアのカンパネッラは、スペイン王国の統治を理想化した作品「De Monarchia Hispanica」(一六〇一年頃)を著している。¹⁶⁾ Pagden, Anthony, "Instruments of Empire: Tommaso Campanella and the Universal Monarchy in Spain", in his *Spanish Imperialism and the Political Imagination*, New Haven, Yale University Press, 1990, pp. 37-63 を参照。

4 Elliott, John H., "A Europe of Composite Monarchies", *Past & Present*, No. 137 (1992) pp. 48-71.

5 Russell, Conrad et al., *Las Monarquías del Antiguo Régimen, ¿monarquías compuestas?*, Madrid, Editorial Complutense, 1996.

6 Suárez Fernández, Luis, *Los Reyes Católicos. Fundamento de la monarquía*, Madrid, Ediciones Riap, 1989, p. 29, 111 及び通説では、年代記に依りて尊称賦予を二四

九四年としてきたが、¹⁷⁾シマンカス文書館で発見された同教皇の教書は、一四九六年十二月十九日の日付をもち。

7 Fernández Albaladejo, Pablo, "Iglesia y configuración del poder en la monarquía católica (siglos XV-XVII). Algunas consideraciones", en Genet, J.-Ph. et Vincent, B. (eds.), *État et Église dans la genèse de l'État moderne*, Madrid, Casa de Velázquez, 1986, pp. 209-216. Idem, *Fragmentos de Monarquía*, Madrid, Alianza, 1992, pp. 60-85; La Hera, Alberto de, "La Iglesia en la Monarquía hispánica", en Russell, C. et al., *op. cit.*, pp. 97-111 を参照。

8 Linage Conde, Jordi, *Alfonso VI, rey hispano y europeo de las tres religiones (1065-1109)*, Madrid, La Olmeda, 1994 を参照。

9 J・ペレスは、キリスト教徒共同体とは異なる法共同体をなしていたユダヤ教徒の王国からの追放は、スペインが中世から近世(Edad Moderna)へと進む歴史過程のなかで不可欠の措置だったと見る。¹⁸⁾つまり、ヨーロッパにおける近世国家は、¹⁹⁾のちの近代国家とは異なり、国家の宗教と臣民の信仰との一致(cujus regio ejus religio)を特徴としたと捉えている。²⁰⁾ Perez, Joseph, *Historia de una tragedia. La expulsión de los judíos de España*, Barcelona, Crítica, 1993, pp. 135-139 を参照。

10 11世紀の制度の重要性はたびたび指摘されているが、近年の研究は、²¹⁾これをカトリック王国たるスペイン近世国家の統合要素としてあらたに強調している。²²⁾ Dedieu, Jean-

Pierre, "La défense de l'orthodoxie", en Hermann, C. (coord.), *Le premier âge de l'État en Espagne (1450-1700)*, Paris, CNRS, 1989, pp. 217-237; Édouard-Laurent, Sylvène,

"Problématique d'une monarchie au XVIIe siècle: Philippe II, un roi absolu?", *Revue Historique*, n. 596, 1995, pp. 225-241 を参照。

11 教皇庁は、異端審問司の「推挙権」を認めたものの、恒常的制度としてスペイン異端審問制が展開しているとは予想していなかった。本来は宗教的問題である異端審問権を

俗権である王権が掌握するようになって、教皇庁とカトリック両王のあいだには少なからぬ対立が生じている。林邦夫「カステイリヤにおける異端審問制の初期的展開」『研究紀要』(鹿児島大学教育学部 第三巻 一九八〇年 二七〇―五七頁; Meseguer

Fernández, J., "El período fundacional (1478-1517)", en Pérez Villanueva, Joaquín;

Escandell Bonet, Bartolomé (dirs.), *Historia de la Inquisición en España y América*,

Vol. I, Madrid, BAC, 1984, pp. 281-433 を参照。

12 Tomás y Valiente, Francisco, "Relaciones de la Inquisición con el aparato institucional del Estado", en Pérez Villanueva, Joaquín (dir.), *La Inquisición española. Nueva visión, nuevos horizontes*, Siglo XXI, 1980, Madrid, p. 46.

13 ベナサルは、異端審問制を「国家に奉仕する社会統制の道具」ともったと言った。近世

スペインにおける異端審問制の展開については、差し当たり、Bennassar, Bartolomé (ed.), *L'Inquisition espagnole (XIV au XIX siècles)*, Paris, Hachette, 1979; Kamen, Henry,

The Spanish Inquisition. An Historical Revision, London, Weidenfeld & Nicolson, 1997 が参照される。

14 「*フランス諸国史*」(1772年) Sioroff, Albert A., *Les controverses des statuts de "pureté de sang" en Espagne du XIV^e au XVII^e siècle*, Paris, Didier, 1960 の古典的研究を参照。

邦語論文として、芝修身「純血法(Statutos de Limpieza de Sangre)」『「カトリック」(南山大学・人文自然科学編 第二六号、一九七六年、二二一―二六三頁を参照)。

15 トデューは、「旧キリスト教徒のスペイン人だけが、選ばれた民であり、神への唯一の忠実なる僕である」と考えた。このことが、外国と対峙して彼らの祖国の統合性と国民意識を培う上での本質的基盤の一つとなった」と述べる。Dedieu, J.-P., *op. cit.*, p. 237.

16 カメーシによれば、実際に異端審問官たちは、人種主義的な「血の純潔」規定に批判的でもあったとされる。Kamen, H., "Una crisis de conciencia en la Edad de Oro en España: Inquisición contra <Limpieza de Sangre>", *Bulletin Hispanique*, tome

LXXXVIII, nos. 3-4, 1986, pp. 321-356.

17 ベナサルは、異端審問制の活動を四つの時代に区分する。第一は一五二〇年代までの時期で、もっぱら隠れユダヤ教徒が審問の対象となっていた。第二は以後一六三〇年代までの時期で、隠れイスラム教徒に加えて、旧キリスト教徒による正統教義やカトリック的道徳規範からの逸脱が対象となった。第三は一六四〇―一六六〇年の時期で、政治状況から新キリスト教徒の問題が活発となった。第四はその後の異端審問制の活動が全体的に低調となる時期であるが、18世紀には啓蒙思想の取り締まりが新たな任務となった。

Bennassar, B., *op. cit.*, Chap. 1 を参照。つまり、カトリック両王が当初より政策的意図として異端審問制を国家装置として活用しようとしていたのかどうかについては、議論が分かれる。我が国においても、この成立理由を論じた研究が林氏によってなされている。

林邦夫「カステイリヤにおける異端審問制の成立」『研究紀要』(鹿児島大学教育学部 第三巻 一九八〇年 五二―七五頁。だが、この制度をもたらすに至った当初の動機と

設立後の政治的利用とは、区別されるべきであろう。実は、コンセルン問題、それがその最初の主たる要因であったことが近年は強調されている。Netanyahu, Ben Zion, *The*

Origins of the Inquisition in Fifteenth Century Spain, New York, Random House, 1995; Kamen, H., *The Spanish Inquisition*, *op. cit.*, pp. 28-65 を参照。

18 Monsalvo Antón, José María, *Teoría y evolución de un conflicto social*, Madrid, Siglo XXI, 1985, pp. 317-336; Pérez, *op. cit.*, pp. 107-139; エリー・ケドウィー編 関根行・

立石博高・宮前安子共訳『スペインのユダヤ人』(平凡社 一九九五年) 所収の論文、とくに第2章、第3章、第4章を参照。追放の諸理由を検討した邦語文献に、芝修身

「一四九二年カステイリヤ王国におけるユダヤ人追放」『アカデミア』(南山大学・経済経営学会編 第七一号、一九八一年、二二二―二五四、同第七三号、一九八一年、二二

四九―二八一頁がある。

19 K. B. ウルフ (林邦夫訳)『コルドバの殉教者たち——イスラム・スペインのキリスト

教徒』(刀水書房、一九九八年、第一章を参照)。

20 差)当たりの Man, Vivian B. et al. (eds.), *Convivencia, Jews, Muslims, and Christians in Medieval Spain*, New York, The Jewish Museum, 1992 を参照。

21 先行研究は枚挙にいとまがないが、Pérez, J., *op. cit.*, pp. 11-40 が適切な概観を与えてくれる。邦語論文としては、林邦夫「中世カスティーリヤにおけるユダヤ人に関する地方史的研究の動向」『研究紀要』(鹿児島大学教育学部) 第二四巻、一九八三年、四五〜六六頁が、全体状況をよく示している。

22 一三九一年のポグロムについては、Wolf, P., "The 1391 Pogrom in Spain, Social Crisis or Not?", *Past and Present*, n. 50, 1971, pp. 4-18 を参照。

23 ハイム・バイナハ「コンベルソと彼らの運命」エリー・ケドゥリー編、前掲書、第4章、所収。

24 Roth, Norman, *Conversos, Inquisition, and the Expulsion of the Jews from Spain*, Madison, The University of Wisconsin Press, 1995.

25 Netanyahu, B., "The Primary Cause of the Spanish Inquisition", in his *Toward the Inquisition. Essays on Jewish and Converso History in Late Medieval Spain*, New York, Cornell University Press, 1997, pp. 183-200 を参照。

26 中世末期のユダヤ教共同体については、邦語文献として、関哲行「中小都市のユダヤ人社会を読む」、『歴史を読む』(東洋書林、一九九八年) 所収、一七三〜二二頁を参照。

また、王権の対ユダヤ教徒政策については、林邦夫「15世紀カスティーリヤにおけるユダヤ人政策」、『研究紀要』(鹿児島大学教育学部) 第三巻、一九八二年、一九〜四二頁。

27 コンベルソの都市同職取得については、Marquez Villanueva, F., "Conversos y Cargos concejales en el siglo XV", *B. R. A. M.*, LXIII, 1957, pp. 503-540 がよく、彼の置かれた全体的状況に関しては、Roth, N., *op. cit.*, pp. 43-156 を参照。

28 上の動向については、Pérez, *op. cit.*, pp. 55-74 を参照。

29 林邦夫「15世紀前半カスティーリヤにおけるコンベルソ問題」、『歴史学研究』第四六一号、一九七八年、一〇一〜一三七、三七頁を参照。

30 注14の文献を参照。

31 近世に入ってからコンベルソの存在がほとんど意味をなさない状況になつて、血の純潔とコンベルソの問題は政治的道具として、また社会規範として利用される。Contreras Contreras, Jaime, "Limpieza de Sangre, cambio social, y manipulación de la memoria", en VV.AA., *Inquisición y Conversos*, Toledo, Asociación de Amigos del Museo Sefarí, 1994, pp. 81-101; Hernández Franco, Juan, *Cultura y limpieza de sangre en la España moderna*, Murcia, Universidad de Murcia, 1997 を参照。

32 Gutiérrez Nieto, Juan Ignacio, "La estructura castizo-estamental de la sociedad castellana del siglo XVI", *Hispania*, núm. 125, 1973, pp. 519-523 を参照。

33 前注に引用の論文、pp. 519-563.

34 五十嵐一成「リベラナに見る近世初頭カスティーリヤ社会史の諸問題」『北大史学』第二十号、一一頁を参照。

35 上の論争については、Lapeyre, Henri, *Ensayos de historiografía*, Valladolid, Universidad de Valladolid, 1978 を参照。

36 ちのち、一五二〇年から一五二二年にかけてのコムニダース反乱を分析した書物で、グティエレス・ニエトは「この反乱敗北の結果、君主がその本来的保障者となるような領主制が、カスティーリヤに確立した」と捉えて、スペイン史学に支配的であった近世絶對王権の近代的理解に対して鋭い批判を加えている。Gutiérrez Nieto, J. I., *Las Comunidades como movimiento antiseñorial*, Barcelona, Planeta, 1973, pp. 16-17.

37 上の点では、民衆のおかれていた社会経済状況にポグロムの主要原因を見ようとするペンタレイの立場に動かし、Mackay, A., "Popular Movements and Pogroms in Fifteenth-Century Castile", *Past and Present*, n. 55, 1972, pp. 33-65.

